

書評

つながる・ささえる・つくりだす
在宅現場の
地域包括ケア

- 著 秋山正子
- 定価 本体 2000 円＋税
- 発行 医学書院

評者

オフィス KATSUHARA 代表
勝原裕美子

誰もがケアに関わり、支え合う存在
となる“地域包括ケア”の具体像

“地域包括ケア”という言葉聞くようになって久しい。いくつになっても、また、どのような健康状態であっても、人々が住み慣れた地域で暮らしていけるように、ようやく人や施設がつながり始めた。それでも、まだ手探りの市町村は多い。

著者の秋山正子さんは、訪問看護や介護の現場に長く身を置きながら、ケアを必要とする人の暮らしの場づくりを支えてきた。その豊富な経験と実績から、地域包括ケアというのはこういうことなんですと、具体的な姿を示してくれたのが本書である。

「つながる・ささえる・つくりだす」
ことで実現される永続的なケア

“病院”には、大きく分けて2種類の人がいる。「患者さん」と「職員」。そこには、構造的にも機能的にも、そして心理的にも明確な区別がある。両者は明らかに異なる者として互いを認識し、それぞれの社会的役割を演じている。

しかし、本書が示す“地域”では、そのような区別はあまり意味をなさない。もちろん、プロとしてケアに関わる人と、ケアを受ける人という対比は可能だ。しかし、暮らしの保健室のような「つながる・ささえる・つくりだす」という機能が発揮されれば、全てが包括された中で必要な役割が自在に変化し、人々を守り、生かすことになる。細切れの時空にいるバラバラな人や点在する施設ではないのだ。

だから、ケアを受ける人だけが特別な存在ではなくなる。誰もがケアに関わり、支え合える存在になる。その継承性、永続性が、秋山さんの言う aging in place（医療や介護を上手に使いながら、できるだけ穏やかに最期まで暮らすこと）となっていく。

本書に登場するトオルさんもタケルさ

んも、細切れの支援では aging in place はかなわなかった。暮らしの保健室の関わりによって、約5年間の間、個人の尊厳、家族との暮らし、地域社会における存在を大事にできたのだと思う。

それらは、たくさんある中での、とてもうまくいった事例なのかもしれない。でも、私は、それらを理想的だとは言いたくない。暮らしの保健室のようなところがあれば、誰もが、このようなケアを受け、受けることができると思えるからだ。

実際、秋山さんの活動は全国に波及している。暮らしの保健室という名称は誰が使ってもかまわないという考えが、それを後押ししている。そして、秋山さん自身は、マギーズ東京という、がんになった人とその家族や友人がとまどい孤独なとき、自分自身の力を取り戻すための場（マギーズ東京ホームページより）をも展開し始めた。本書には、そのオープニングに至るまでの経緯が記されている。

現場で悩む人の背中を
押してくれる

秋山さんは、本物の社会起業家だ。在宅現場で働く人たちも、在宅とつながる医療機関の人たちも、市町村の担当者の方々も、本当はここが足りないとか、こうだったらいいのにと気づいていてもまだできていないことがあるだろう。本書は、そういう人たちが、一歩進む後押しをしてくれるような、そんな強さと温かさを与えてくれる。